

## 当院における静脈リザーバー造設症例の現状について

川添 史<sup>1)</sup>、佐久間 隆幸<sup>1)</sup>、村林 由紀<sup>2)</sup>、加藤 はつ美<sup>2)</sup>、見並ひとみ<sup>3)</sup>、  
鶴森 立美<sup>3)</sup>、笠井 久豊<sup>4)</sup>、森谷 勲<sup>5)</sup>、清水 敦哉<sup>5)</sup>

済生会松阪総合病院 NST 薬剤部<sup>1)</sup> 管理栄養課<sup>2)</sup> 看護部<sup>3)</sup> 検査課<sup>4)</sup> 内科<sup>5)</sup>

【はじめに】当院において、静脈リザーバーの造設症例は年々増加傾向にある。静脈リザーバー造設症例の実態把握を目的に検討を行った。

【方法】当院において2006年10月1日から2007年9月30日の一年間に静脈リザーバーを造設された169名を調査した。

【結果】対象は年齢30歳から97歳(69.5±13.5歳)。男性89名、女性80名。基礎疾患は胃がん27例、大腸がん25例、肝・胆・膵がん21例、肺がん21例、乳がん21例など。良性疾患は17例で、難治性下痢3例、ウイルス2例、等であった。静脈リザーバーの使用目的は化学療法施行目的が109例、栄養投与目的37例、末梢血管確保10例、在宅栄養目的が10例であった。合併症が感染6例、カテーテル閉塞2例、穿刺部痛2例、気胸1例みられた。予後は退院66例、死亡55例、入院中28例、転院19例であった。

【考察】静脈リザーバーの造設症例は増加傾向にある。その使用目的は化学療法が中心であるが、栄養療法に用いられる症例も増えつつある。しかし、その適応や合併症が問題になる症例もあり、NSTが積極的に関わっていく必要があると思われた。